



令和3年度

鹿児島県の教育

11月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校長部会副部会長
追田博幸

教育的ニーズを どのように捉えるか

次年度の就学に向けた教育相談が各地で行われ、一人一人の子どもの最も適切な学びの場を検討する時期となった。周知のとおり就学先となる学校や学びの場の判断・決定においては、子どもの障害の状態のみに着目するのではなく、子どもの教育的ニーズ、学校や地域の状況、保護者や専門家の意見等を総合的に勘案して、個別に判断・決定することが求められている。

しかしながら、学校現場においてこの教育的ニーズという概念をどのように捉えたらよいか、言葉の曖昧さもあり、なかなか難しいという話も聞いたことがある。

本年六月、障害のある子どもの就学先となる学校や学びの場の適切な選択に資するよう従来の「教育支援資料（文部科学省）平成二十五年」が「障害のある子供の教育支援の手引」に改訂された。今回の改訂では、子どもの教育的ニーズを整理する考え方がまとめられ、就学に関連するプロセスに関する内容の充実が図られているが、特筆すべきは、教育的ニーズの内容を障害種ごとに具体化し、就学先となる学校や学びの場を判断する際に重視すべき事項の記載が充実されたことである。

本手引で教育的ニーズについては、子どもの障害の状態や特性、心身の発達の段階等を把握して、具体的にどのような特別な指導内容や教育上の合理的配慮を含む支援の内容が必要とされるかということを検討することで整理されるものであるとされた。特別な支援の内容だけでなく、自立と社会参加を見据えて、現時点でその子どもに必要な指導内容も含めて教育的ニーズを捉えるということである。

言うまでもなく子どもの実態等にに応じて、教育的ニーズは多様であり、また、その時々様々な条件で変わりうるものである。だからこそ教育的ニーズを捉える上では、障害のある子どもに関わるすべての関係者が、子どもの将来を見据えて多面的な視点をもつことがますます重要になってくると考える。

最後に、どのような学びの場であっても、大切なことは障害のある子どもが授業内容が分かり学習活動に参加しているという実感や達成感を感じながら、その子どもに応じてしっかりと生きる力を身に付けていくことである。新型コロナウイルスの感染拡大や急激に変化する時代の中で、障害のある子どもへの支援の在り方も問われている。それぞれの学校や学びの場に期待されていることは改めて大きい。

令和3(2021)年 11月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



医師として「死」と向き合う

医療法人 浜友会
きいれ浜田クリニック 院長 濱田 努

あなたには「死」というものがどのように見えていますか。私はつい最近まで「死」は敗北でしかありませんでした。

「先生、もうやめてあげてくださいー！」

患者さんにまたがり汗をかきながら心臓マッサージをする私に、涙しながらご家族の娘さんが言いました。夢中だった私は、なぜやめろと言われるのが分からず、呆然としたあの日。

それは名古屋での研修医二年目に出会った胃がん末期の七十歳の女性でした。残された時間が長くないこの方は、私に会うたびに「助けてね。」と笑顔で言いました。予後が分かっていたからこそ、声にならない声で「分かりました。」と振り絞って答えていました。数日後、昼食中に呼吸停止の緊急電話。私は気が動転し、本来は行わないと決めていた蘇生処置を必死に行いました。私が約束を果たさないといけないのだと必死でした。

約束を果たせなかった、役に立てなかった。「死は敗北なのだ」と、涙があふれ、指導医の前で号泣したことを昨日のことのように思い出します。

「生老病死」、この言葉のなかで医師が勉強す

るのは実は「病」のみです。早く病気を見つけ、どうやって病気を治すか。人が老いることや死ぬことについて医学部では未だに勉強しません。でも死は訪れるのです。私は呼吸器内科の医師として、肺がんをはじめ多くの方をお看取りしてきました。その中で私は役に立ちたいのに役に立てない苦しみと戦い、「死」との間に壁をつくり、多くの方が亡くなるのは別の世界の話で私とは関係ないと言い聞かせて過ごしました。

時が過ぎ私は鹿児島へ帰り、大学病院勤務を経て、実家のある喜入で開業医をするようになりました。私は自然とがん末期の方を在宅で支えることとなりました。

そこで出会った、膵臓がん末期の七十代の女性。大学病院から退院し自宅に帰った初めての往診の時、私に会ってすぐに泣きながら、彼女は私へ訴えました。

「私を殺さないでください、お願いします。」

「お米も炊けない夫と、まだ独立できてない息子がいるのです。そんな二人を残してどうして私が死ぬのですか。」

在宅医療を始めたばかりの私は何も言えずそ

こに佇むことだけで精一杯。その後お亡くなりになる二週間の間、彼女はずっと泣いていました。これは私には極めて苦痛な体験でした。役に立つために医師となったにも関わらず、ここでも私は全く役に立たなかったからです。

しかし、私は、彼女から気付けられたのです。病気はあくまでも人の僅かな部分でしかないという当たり前のことに。向き合うべきは「病氣」ではなく「人」であると。しかし、人と向き合うことを決めてからは迷ってばかりでした。特に「死」と向き合うことはとても怖く、果てしなく、どこにも答えがないからです。しかも、人は必ず死にゆく。しかし、必ず死ぬのであれば、私はその人の「死」との縁を大事にしないといけないのではないかと。そうして私は穏やかに過ごしてもらえようように医師としてできることを考えるようになりました。「死は敗北ではなく、人の一部である」と。

「私を殺さないで。」と泣きながら話した膵臓がんの女性。現代医療では解決しない苦しみがあつたとしても、誰かとともにその苦しみを聴くことができていれば、穏やかでいられたのかもしれない。

私は今、医療従事者向けに苦しむ人との接し方講座を行いつつ、子どもたちにも「苦しむと向き合ういのちの授業」を小中学校で開催しています。

医師である私だけでなく、医療者も、家族も、民生委員さん、子どもも、地域の方も、みんなが苦しむ人から目を逸らさず、逃げずに向き合うことができる町。そんな町を、私は目指しこれからも活動していきます。



学校における業務改善の一層の推進

妙円寺小(日) 宮里 英樹

はじめに

県教育委員会は、平成三十年三月に策定した「学校における業務改善方針」に基づき、平成三十一年三月に本県の実情に即した数値目標を設定し、中長期的な具体的取組を「学校における業務改善アクションプラン」として取りまとめた。「学校における働き方改革を通じて教育の質の維持・向上」という目的の達成に向けて、長時間勤務の削減方策を実施するに当たっては、教職員一人一人が業務改善が進んでいると実感することが重要である。全ての教職員について「正規の勤務時間を超える勤務は月四十五時間以内」を目標とし、教職員の八十%以上が「業務改善が進んでいる」と実感することを目標としている。この計画期間は、二〇一九年度から二〇二一年度までの三年間としているため、本年度が三年目の最終年度である。

二 具体的な取組

平成三十一年一月に「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)」が取りまとめられ、働き方改革の目的のもと「膨大になっ

てしまった学校及び教師の業務の範囲を明確にし、限られた時間の中で、教師の専門性を生かしつつ、授業改善のための時間や児童生徒に接する時間を確保できる勤務環境を整備することが必要である」とある。そこで、勤務環境を整備することこそ、校長のやるべきことと捉え、次のことに取り組んだ。

(一) 重点取組①「業務改善に対する意識改革」

ア 職員への働きかけ

・ 1 Action Only
ryの設定(名刺サイズカードの作成)

イ 退勤時刻の呼びかけ、定時退校日設定

ウ 毎月の衛生推進委員会の実施

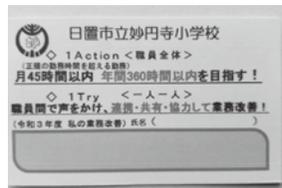
(二) 重点取組②「事務の負担軽減と専門スタッフの活用」

ア 校務分掌の工夫、校務のデジタル化

イ 支援員、関係機関、地域の方々の協力

(三) 重点取組③「授業準備の効率化と時間確保」

ア 校時表、教育課程、研修の見直し
イ 行事の精選、PTA活動の見直し



三 成果と課題

本校での業務改善の取組で、放課後の教材研究の時間を教職員一人当たり月約十二時間、年間約百二十五時間確保することができた。本年度の一回目のフォローアップ調査の結果では、教職員の九十六%が業務改善が進んでいると感じている。本校の取組が全体に少しずつ浸透していると考えられる。

しかし、令和元年十二月に給特法の一部が改正され、文部科学省は、「公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドライン」を法的根拠のある「指針」に格上げし、在校等時間の縮減の実効性を強化した。本校では、上限時間「月四十五時間以内、年間三百六十時間以内」について、全体平均としては達成しているが、個人一人一人をみると改善すべきところがある。

四 おわりに

昨年度からの新型コロナウイルス感染症対策の中で、学校やPTAの行事を見直してきた。その中で教育活動を止めないように、また、児童にとって有意義な取組になるように検討してきた。このことは、今後の業務改善の視点に生かされると考える。

学習指導要領が改訂され「社会に開かれた教育課程」を展開する中、教育の質の維持・向上を図るために、校長がリーダーシップを発揮し、職員や保護者、地域と連携、共有、協力しながら、児童を社会全体で見守り育てる環境が整ったとき、業務改善は一層進み、持続可能な取組につながっていくと考えられる。



ピンチから学んだことを生かして

持留小(隅) 幸福 ひとみ

何ができるようになるか、何を学ぶのか、どのように学ぶかという、子どもの視点に立って改訂された新学習指導要領が全面实施され二年目。頭では、分かっているが、子どもにこの視点を意識して授業が展開できているのか、私自身子どもと接するとき、そのような考えを引き

出せているのかと不安になる。そんなときに、このコロナ禍が拍車をかけ、日々の学校生活が、いつもと変わりなく平穏に過ぎていってこれればという守りに入る時期が続いた。さらに、持留小校区は、未曾有の豪雨災害に見舞われ、五日間の臨時休業を強いられた。学校近辺は、全面通行止めにより、孤立化し、防災ヘリで人命救助される事案も発生した。正に、学校は、「安心・安全な場所」から、危険な場所へと変わってしまったのである。このときほど、管理職の責任の重さを感じたことはなかった。ただし、それはずっと後になって分かったことだ。

豪雨災害当日の早朝は、一刻の猶予もならず、即決するしかなかった。それは、職員、保護者、町教委への臨時休業しか選択できない緊急連絡であった。今思うと、ドラマの一シーンのようでもあるが、メールや電話連絡の両方の手段を

取っている間に、裏山が崩れその土砂が、廊下に流れ込んだのである。もちろん、それは、教頭と二人で除去するしかなかった。その後、停電、携帯電話の通信障害、孤立化などから身動きが取れなかった。

この五日間の臨時休業によって、授業時数の確保より、冒頭に述べた子どもが何を学ぶかの方が重要であると感じた。そこで、職員には、連日、校門周辺に一・五メートルほど積まれた土砂を近所の方々が協力して除去してくださったいきさつを話した。そして、「子どもには、発達の段階に応じて、災害の恐ろしさや命を守る行動、土砂の除去に携わった方々の苦労等を学ばせる」ことが生きた学習だと伝えた。その結果、現場を見せたり、災害後の痛々しい写真等で丁寧な説明を加えたりしていた。「百聞は一見に如かず」で、子どもたちも何かを体感したと思う。

学校としては、あらゆる機会をとらえて、町役場、警察署、電力会社等に、直接災害復旧への早急な実動を依頼した。また、通学路においては、安全面が解消されなかったため、徒歩での登下校は、約半年間ストップせざるを得な

かった。幸い、どの家庭も車での送迎に全面協力していただけた。

想定外の出来事(コロナ禍・突然の豪雨災害)を経験して、今取り組もうとしていることは、臨時休業になった時の「オンライン授業」の実施である。今年度、四月からスタートしたGIGAスクール構想の一人一台タブレット端末の活用。ゼロからのスタートにもかかわらず、職員の意志で、効果的なICT・タブレット活用を授業に取り入れるための研究をすることになった。講師の直接指導やICT支援員の力を得ながら学ぶ方が、指導者の自分たちも早く授業に生かせるから等の意見が口々に飛び交う。子どもたちのための想いは、管理職と同じであることを実感。

コロナ禍は多少収まり、今年度は、台風の接近による、豪雨災害の被害を心配する時期は過ぎた。しかし、非日常が日常となった学校生活は、「新しい生活様式」を継続している。授業では、全学年が毎日タブレットに向かいながら、ノートとして使ったり、問題を解いたりして活用している。すでに、タブレットは、全家庭に持ち帰り、通信チェックも確認できた。

先日、一年生担任に、「もし、臨時休業になったら、オンライン授業が可能か。」と問うと、「大丈夫でしょう。」の答えが返ってきた。学校は、随分前から改革が叫ばれ続けてきたが、今、心から現場が変わりつつあることを実感しているとともに、その手応えも少し感じている。それを更に進めていくために、管理職としての力量を発揮できるよう、日々努力する教員でありたい。



『もつといい自分を目指す中山小 楽しさも県内一』 の実現に向けた「チーム中山」の挑戦

中山小(市) 松山 英作

一 はじめに

本校は、鹿児島市の谷山北地区にあり、全校児童千四百四十九人、五十七学級、職員数九十一人の県内一、全国でも十指に入る大規模校である。本校は、これまで全校を挙げて読書活動に取り組んでおり、子供読書活動推進優良校として平成三十年に県の表彰を、令和元年に文部科学大臣表彰を受けている。年間平均貸出冊数が一人平均約二百三十冊と多く、読書活動を通して言葉への感性を高めていることが令和二年度のかわなべ青の俳句学枝賞にも繋がっていたように思う。

二 経営方針のキャッチフレーズ化

本校の教育目標の「もつといい自分を指す中」を生かし、「もつといい自分を指す中山小 楽しさも県内一」という親しみやすいキャッチフレーズにして、児童数県内一の本校で学ぶことの誇りと自信を培い、教児ともに「県内一楽しい」学校づくりに取り組んでいくことを常に意識させながら経営に取り組んでいる。特に、「自尊感情・自己有用感を育てる学級づくりの充実」に力を入れており、学級ごとに意図的にほめる場の設定やほめ言

葉シヤワー等を行っており、その取組状況を面談時に確認している。

三 「チーム中山」の意識付けと工夫

職員数が九十人を超える本校では、職員の綿密な連携と協力体制が不可欠であり、常に「チーム中山」としての気運を高めていくことに力をいれている。学年主任を中心とした各学年約十二人の学年部が主な活動単位であり、二人の教頭が奇数・偶数学年を担当し、常に学年主任と綿密な連携を図っており、学年間の協力意識は高い。校内人事の工夫が重要である。また、大切なことは常に全職員を集めて協議するように心がけ、全職員で課題を解決していくという一体感を醸成するようになっている。

四 分かる授業が楽しい学校生活の基盤

学力向上を語る時、「分かる授業・楽しい授業は、楽しい学校生活の基盤であり、確かな学力をつけることが子供たち一人一人の夢の実現につながる。」と毎回触れている。「ラスト十分のチャレンジ」「二分前着席・黙想」「家庭学習強化週間」「チャレンジ週間」などの取組も随分定着が図られ、本年度のNRT

検査や全国学力・学習状況調査の結果にも反映されていた。

五 授業力を磨く「チーム中山」の挑戦

職員研修では、テーマに沿った研究授業を全学年で実施するが、学年部を中心に授業の立案をし、数回の事前授業を経て、研究授業、ワークショップ型の授業研究という流れで進めており、「自分たちの授業」という意識で取り組んでいる職員が多い。また、「一授業」という形で、自分の研究教科の授業公開をする職員も増えてきた。授業の様子は校長室だよりで紹介し、授業者への感謝や職員への啓発につなげている。

六 保護者・地域に信頼される学校に

「クレームはチャンスである」と毎回触れている。迅速な初期対応、途中経過報告を「チーム中山」で取り組むこと。そうした対応が保護者や地域の信頼につながることを繰り返し伝えてきた。児童数も多く、様々なトラブルもあるが、担任だけでなく、学年主任、生徒指導主任、教頭等が一緒になって迅速な対応を行っており、早期解決につながっている。

七 おわりに

児童数県内一の本校で学ぶことの誇りと自信を培い、教児ともに「県内一楽しい」学校づくりに取り組んでいくことを常に意識させ、職員数が多い本校のメリットを生かしながら「チーム中山」として様々な課題解決に当たってきた。今後も、全職員がやる気をもって取り組める学校づくりを心がけていきたい。



一 学校経営の視点

本校は、生徒のキャリア発達という視点から、従来の教育活動を見直す取組を進めている。

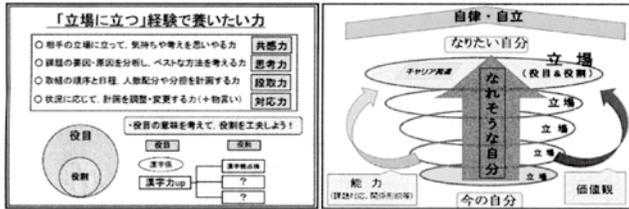
キャリア教育は、内容面で進路指導や特別活動と混同されやすい

が、育てたい「資質・能力」を明確に掲げ、意図的な活動を通して、生徒個々のキャリア発達を見取る点で大きく異なる。経営方針の中で、キャリア発達の要素として、「共感力」「思考力」「段取り力」「対応力」を位置付け、年度当初のガイダンスにより生徒と共有している。

「立場」とは素の自分ではなく、責任ある役目や役割の中で立ち振る舞う状況に身を置くことである。仕事が固定化し、新たな挑戦が進まない従来の「役割」に縛られず、「役

キャリア教育を柱とした教育課程のブランディング
「立場で育てる教育」の推進

城西中(市) 濱田耕一



目」本来の意味を考え、新たな活動を取り入れていくチャレンジ精神を大切にしている。

二 生徒を立場に立たせる教育活動

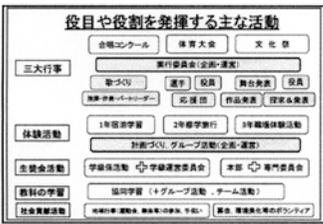
(一) 生徒が企画・運営する行事

合唱コンクール、体育大会、文化祭は、生徒が「三大行事」と呼び、共通テーマの下で自ら「めざす自分たちの姿」を価値付けている。これらの行事は、生徒による実行委員会が主体的に運営を担っているが、特に体育大会は、大会プログラム（開閉会式、競技種目、応援団等等）に関する企画まで実行委員会が行い、その案を職員会議で承認する形を取っている。達成感を通して、生徒個々の姿に変容が見られる。

(二) 縦割り作業

清掃活動は、各学年からの異学年集団のチームで行う。三年生のリーダーシップと程よい緊張感により、精一杯取り組み姿が見られる。

(三) 価値や成長を共有す



るキャリアパスポート

年度当初に、目標とする「なりた自分」を考えさせ、チャレンジしたい「役目」や「役割」を記録させる。その後、学期末や行事が済んだ節目に、達成度や自身のキャリア発達の様子を見つめさせ、その内容や思いを教師が共有することに取り組んでいる。そのため、キャリアパスポートの自校化を図り、活動内容と評価をマッチングさせている。年度末にはキャリアアーンケットにより総括を行う。

三 カリキュラム・マネジメントの本質

キャリア教育を進めるねらいは、カリキュラム・マネジメントである。PDCAサイクルは、改善への意欲や必要性への共感がなければ、稼働せず、絵に描いた餅である。サイクルを循環させるエネルギーは、教育活動の価値付け、いわゆる教育課程のブランディングである。そして、その価値付けを生徒と教師が共有することで効果的なものとなる。取組を通しての教師の評価として、「立場に立ったのも、キャリア発達が進んだのも、実は生徒ではなく教師自身だった気がする。」という感想がすべてである。



笑顔輝く、あつたかさんの学校

増田小(熊) 川邊 浩 幸

一 はじめに

本校は、元大関若島津関(現二所ノ関親方)の母校である。校長室には寄贈された現役時代の化粧まわしと勇壮な写真が飾られ、後輩たちに元氣や勇氣を与えている。

現在、児童数三十七名の小規模校ではあるが、町の陸上記録会や水泳記録会、相撲大会での上位入賞、バレーボール少年団の地区大会優勝などの活躍を続け、励みになっている。

二 伝統と特色を生かす

本校は近年、少人数でも取り組みやすい一輪車とラジオ体操に力を入れている。県「チャレンジかごしま」では、一輪車で上位入賞や学校賞を連続受賞している。また、全国ラジオ体操コンクールでは、六年連続上位入賞し、文部科学大臣賞も受賞しており、子どもたちは、自信と誇りをもっている。

三 課題解決に取り組む

(一) 道徳教育の充実

異年齢での活動が多く、上級生が下級生の世話をよくしているが、馴れ合いから言動が粗くなることもあった。

ア 道徳授業の改善

令和二・三年度の熊毛地区道徳教育研究協力校の指定を受けて、「考え議論する」道徳科の授業への転換を図った。重点内容項目を「親切、思いやり」にし、実践につながる発問、思考を可視化する手立て、対話を促すタブレット活用、家庭と連携した振り返りなど進めている。

イ 児童会による取組

本校のキャッチフレーズを標題のようにし、「あつたかさん」の意味を全校朝会で説明した。それから、児童会でキャラクターを募集した。全員が参加し選ばれたデザインは校内に掲示し、シールにして配布することで意識を高められた。

ウ 仲間づくりの活動

朝のショートの活動に、「あつたかさんタイム」を設定し、全校や学級でよりお互いのことを知ったり、気持ちを考えてたりできるゲームなどを行っている。

エ 認め励ます設営

道徳コーナーは、授業の様子や感想、人權教育コーナーは、自他の長所や頑張

(二)

り、作成した標語などを掲示している。また、国語や図工の作品は、教師や友達のコメントを付箋で付けて認め励ましている。さらに、新聞掲載作品は、パネルや各種便りで紹介するなど、自己肯定感を高められるようにしている。

最重要課題の学力向上対策

学力向上は、粘り強く取り組ませることと、個人差への丁寧な対応を必要とした。

ア 「こだわりの視点」の共通実践

授業では、各種学力検査の結果を確認しておく。そして、めあてとまとめの整合や見通し、自分の考えをもつて対話すること、効果的で深化を図る問い返し、振り返りと習熟、ICT常用に努める。

イ 全校体制での取組

単式学級担任や教頭による複式授業への協力、良問の年間を通した個別指導、支援を要する子どもへの対応など、管理職も含め、職員が協力して取り組んでいる。その成果が、学力検査で県や全国を上回る結果に現れてきている。子どもたちも自信をつけ、意欲も高まっている。

四 おわりに

本校の特色である運動面のよさを生かしながら、道徳教育を充実させ、学力向上に全校体制で継続的に取り組んだことで、体・徳・知のバランスのよい教育を進めることができた。今後も学校・家庭・地域が連携し、「よりよく生きる」子どもを育て、「笑顔輝く、あつたかさんの学校」を創っていききたい。



喜んで登校、満足して下校する子どもの育成 〜教育風土・極小規模校のよさを生かす〜

佐仁小(大) 上村 江里香

一 はじめに

本校区は、奄美大島の北部・奄美市笠利町の最北端に位置している。教育への関心は高く、進取・向学の気風に富み、高知県知事を務めた永野芳辰氏や初代鹿児島県教育長を務めた永野林弘氏さらに、シマ唄の名手として名高い南政五郎氏など、偉大な先人もおり、学校教育への熱意は高い。また、浜おれやシマ唄、八月踊りなどの伝統行事や文化を守り続けている。

本校の児童数は九名で、極小規模校である。めざす子どもの姿として「喜んで登校、満足して下校」の目標が掲げられている。佐仁の教育風土のよさを生かしながら、極小規模校だからこそできる教育に取り組んでいる。

二 教育風土を生かす

(一) シマグチ教室

校区内で多く使われている方言は、現在は高齢者しか使っておらず、子どもたちは日常生活で使う機会が少ない。そこで、学校応援ボランティアの方々を講師としてお招きしシマグチを教えていただいている。また、数年前から授業の挨拶や校内放

送にもシマグチを取り入れている。シマグチを使う目的が明確になり、指導者の方は、「伝統が受け継がれることがうれしい。」と喜んでくださる。子どもたちのシマグチに対する関心が高くなってきていると感じる。子どもたちの流暢なシマグチ放送を聞く心が和む時間となる。

(二) 音楽集会でのシマ唄教室

本年度より毎月一回の割合でシマ唄の伝承活動に取り組んでいる。佐仁校区のシマ唄は、言い回しや男女の掛け合いなど独特だと言われている。三人の講師の方々が毎回丁寧に指導してくださる。本来なら敬老会や地区の生涯学習大会で披露する予定であったが、来年度に持ち越しとなった。子どもたちはいつもこの時間を楽しみにしている。

(三) オオゴマダラの飼育・観察

校庭内には蝶小屋があり、十数年に渡ってオオゴマダラの飼育・観察活動を続け、令和元年には全国野生生物保護功労賞をいただいた。本年度は、食草であるホウライイカガミの栽培はもとより、佐仁校区にある

三 極小規模校のよさを生かす

本校では、学習の振り返りの場に、学習の中で分かったことや友達とのよき、自分の感想を発表するキラリタイムの時間を設けている。友達との意見交流をし合うことで、自分の考えのよさや他者との考えの違いに気付くことができ、自尊感情も高まりつつある。また、あらゆる学校行事において、一人一役の仕事が任せられ、責任をもって最後まで頑張ろうとする姿がある。そんな児童の姿を職員や地域の方々がいつも温かいまなざしで見つめ称賛の声をかけてくださることは、子どもたちのパワーの源になっている。

四 おわりに

この他にもさとうきび栽培及び黒糖作り、海遊び(自然探索)、お年寄りお宅訪問や老人クラブとの交流会(年二回)等、地域の教育風土を生かした特色ある教育活動が展開できている。これも地域の皆さま、子どもたちを「地域の宝」として慈しみて育ててくださるからできている活動である。

これらの活動を通して、子どもたちは校区の自然や教育風土のよさを実感し、シマを愛する誇れる人材に成長してくれると確信している。明日も、子どもたちが「喜んで登校、満足して下校」できる学校づくりに地域と共に邁進していきたい。



「神様の立場に立って考え、行動しなさい。」

皇徳寺小(市) 宮下 正 信

「腕立て伏せ 四万六千一回、片腕で 八千七百九十七回。世界の頂点は普通の人の平均値と百倍の差があり、特殊な資質をもった人が徹底的なこだわりと執念を燃やさない到達できない高さだ。」

アテネ五輪競泳女子八百m自由形で柴田亜衣選手が金メダルを獲得した際に、鹿屋体育大学教授で水泳部顧問の田口信教氏が「柴田 金への道」と題して南日本新聞に寄稿した文章の冒頭である。

私自身、平泳ぎの選手を目指すきっかけとなった、ミュンヘン五輪百m平泳ぎ金の田口信教教授の講座だった鹿屋体育大学の公開講座に参加させていただいたのは、鹿屋市立笠野原小

学校に勤務している時だった。ある時、鹿屋体育大学の学生は、それぞれの対外試合前に、空き缶拾いをしながらキャンパスまで通うよう指導をされていることを聞いた。

柴田亜衣選手は勿論、今年行われた五輪においても、世界の頂点を争う選手を目指すには、確かに素質に加えて忍耐力と意志力、新しいことや難しいことに挑戦する勇氣と成功を信じる信念が必要であろう。あのときの柴田選手の成功は、鹿屋体育大学入学以来、早朝五時から一万m泳ぎ、講義後も夕方一万m+筋トレ一時間、年間を通して休むことなく継続して成し得たものである。類い稀な素質の持ち主たちが限界への挑戦を繰り返し、時間と労力を惜しむことなく燃やして努力し頂点をその時に合わせていく世界にあつては、それでもメダルに到達できない場合もある。

「四年に一度のチャンスを確実に掴むための運も引き寄せなければならぬ。スポーツは運動運が動く世界。運を掴むために、神様も味方に付けなければ勝てない。」

そして、田口教授が学生たちに、「神様を味方に付けるためには・・・」と語ったのが冒頭の表題である。「ファンに愛されるサッカー選手になりたい。」「人に愛される柔道選手になりたい。」「人言は数多くある。だが、田口教授の言葉はそれだけではなかった。」

「柴田選手の口から人を中傷したり、非難した

りする言葉を一度も聞いたことがない。友達やチームを大切にし、人の幸せを応援するだけでなく、人が嫌がるような清掃を率先して行う選手だ。また、繰り返し支援者への感謝の言葉が出るなど、神が味方したくなるようなスポーツマンシップの備わった選手である。」

今後も、世界中でこのような人々が輩出されればと願っている。

九初(きゅうじゅ)の功を一簣(いちがい)に虧(か)く
九初(きゅうじゅ)の功を一簣(いちがい)に虧(か)く

柳田小(南) 若松 新一郎

「九初(きゅうじゅ)の功を一簣(いちがい)に虧(か)く」とは、ご存じのとおり、「九初(きゅうじゅ)ほどの(非常に高い)山を作るのに努力してきたが、最後の(一簣(いちがい)もつこ)一杯(いっぱい)分の土が足らずに山が完成しない。」という故事からくる諺(ことわざ)である。私には、この諺(ことわざ)について決して忘れることのできない思い出がある。

初めての教頭職の赴任先は、伝統的に錦江湾横断遠泳に取り組んでいる小学校だった。毎年五月の連休明けからプール練習が始まり、複数回のプール検定を合格し、七月の海練習を経て、本番当日を迎えるのが流れであった。約三か月の練習をこなした児童を前に、明日が本遠泳と

いうタイミングで、新任教頭に励ましの言葉をかける大役が任せられた。

『九初の一氣を一氣に虧く』という諺がありま
す。もし、今夜風邪をひいたり、お腹を壊した
りしたら、これまでの努力が一瞬で無駄になっ
てしまいます。体調管理に気を付けましょう。』
と語り、達成感に浸っている私に、児童の祖父
を名乗る男性が声をかけてきた。『一氣』と聞
違って認識していませんか。『二簧』です。例え、
何かあつて明日泳げなくても、子供たちの頑張
りは決して無駄にはなりません。むしろ、これ
までの頑張りの方に価値があるのです。』

実際に私は、「一氣」と誤認していた。ただ、「無
駄になる」という意味があることは確認してい
た。しかし、この場において「無駄になる」は、
確かに明らかに相応しくない言葉だった。

言葉は、発する側の意図がそのまま伝わるか
どうかは分からない。それでも、役や立場で話
をしなければならぬ者は、十分に準備をし、
吟味して語らなければならない。肌寒い五月に
泣きながら泳いでいた子どもたちの逞しい成長
を改めて感じながら、自分の言動に最大限の責
任をもち対応しようと決意したことを思い出す。
退職まで数か月となり、これまで積んできた
ものを想起する頃となった。最後の「一簧」を
積み、高くはないが、自分という山を完成させ
るために、三月まで全力で駆け抜けていきたい。

「啐啄同時」に思う

長島中(北) 石垣健二

『啐啄同時』、ロサンゼルスオリンピック体操
個人総合金メダリストの具志堅幸司さんが、以
前赴任していた中学校での講演会で語られた、
とても印象に残る言葉である。

これは、悟りを開こうとしている弟子に、師
匠がうまく教示を与えて悟りの境地に導くこと
を指す禅語で、「啐啄」は、何かをするのに絶
妙なタイミングを現す言葉だそうだ。

「啐啄」の啐とは、卵から雛がかえるとき、
内側から雛が殻をつつくことで、啄とは、母鳥
が卵の殻を外からつつくことである。この両者
の行動が一致したとき、卵の殻が割れて新しい
生命が誕生するようだ。

教育現場においての『啐』は、学ぼうとする
ものの意欲を表していると言ってよいと思う。
馬や牛をいくら川辺に連れて行っても、飲もう
という欲望を持たない牛馬に水を飲ますことは
できないのと同じように、学ぶ意欲のない者に
教えようとしても、教えたことを身に付かせる
ことは難しい。また、教える者の行動が適切さ
を欠いていれば、十分な効果を上げることはで
きない。両者が共に揃っていて、しかも、適切
さを備えて初めて教育の効果が現れる。

このことは、学校教育だけでなく、社会教育、

家庭教育など、教育という営みすべてに当ては
まる。『啐啄同時』、子どもの発するサイン(兆
候)を見逃さず、同じベクトルで、時機を捉え
て、子どもに接して導くことが大切だと、常に
思い起こされるひとことである。

計画は綿密に、実践は大胆に

尾母中(大) 伊地知 勇

新規採用教員として離島の中学校へ赴任し、
日々流されるままのような状態で教師生活を
送っていた頃のことである。

指導教官の指導も仰ぎながら指導案を作成し、
初任研の一環としての研究授業に初めて臨んだ。
大変緊張した上に内容も不十分だったので、意
気消沈したのを鮮明に覚えている。

その日の放課後、校長先生からの個別指導の
際に頂いた言葉が「計画は綿密に、実践は大胆
に」である。綿密さも大胆さもない中途半端な
授業を行ったことに、悔しさと恥ずかしさを覚
え、さらに真剣に授業改善に取り組み毎日が始
まった。授業実践やその他の校務を進めていく
うちに、その言葉の重みや奥深さをじわじわと
実感することとなった。その後の教師生活に大

きな示唆を与えてくださった校長先生には感謝しきれないほどである。

非常に長い時を経て、経験者教頭研修会に参加したときのこと。経営哲学について学ぶ中で大変懐かしい響きに出会った。「京セラファイロソフイ」の生みの親である稲盛和夫氏の「樂觀的に構想し、悲観的に計画し、樂觀的に実行する」という言葉である。

現在、小中併設校において経営を担っているが、歴代の校長先生方が紡いでこられた学校経営を受け継ぎつつも、新たな挑戦に熱意をもって前進できているだろうか、自問する毎日が続いている。

また、「校長として職員の長所・短所を的確に把握しながら適切なマネジメントを行っているか。」「前年踏襲にとらわれることなく、最大限の効果を狙った教育実践が進んでいるか。」「職員一人一人が、思い切った様々な実践に取り組むことができているか。」などと自省する度に、「綿密さ」と「大胆さ」という言葉を思い返し、「樂觀」を装っている。

次年度の教育課程編成が正に始まろうとする中、極小規模校という本校の苦しい実情も踏まえつつ、子どもを中心に据えた特色ある教育を進めるための方策を職員と共に樂觀的に探っていきたい。

ある日の校長講話



「最後まで頑張ること」

折多小(北) 田原 俊 一

今日は最後まで頑張ることの大切さを教えてくれた人の話をします。それは今から五十四年前の東京オリンピックピックでのことです。その陸上競技の一万メートルのレースで「ゼッケン67」という感動の話が生まれました。主役は、今のスリランカという国のカルナナダという選手です。

一万メートルという長いレースの後、次々と選手がゴールに入ってきました。アメリカの選手が優勝して、日本の円谷選手も六位に入賞、やがて最後のランナーがゴールに入ってきました。スリランカのカルナナダ選手でした。

ところが、ゴールをすぎても、カルナナダ選手は走るのをやめませんでした。彼は周回遅

れだったのです。しかも、三週の周回遅れでした。二週目に入り、みんなじっとグラウンドを一人で走る彼を注目しました。彼がゴールをしたとき、優勝した選手以上の拍手が、競技場を包みました。勝ち負けよりも最後まで頑張り抜くことの大切さを教えてくれた、カルナナダ選手に、日本中の人々が感動したのです。

レースが終わり、インタビューでカルナナダ選手は、「国には小さな娘が一人いる。その娘が大きくなったら、お父さんは東京オリンピックで、負けても最後まで頑張って走ったと、教えてやるんだ。」と言ったそうです。

カルナナダさんは、走る前にしっかりと走り切ると決めていたにちがいありません。三周も遅れて恥ずかしかつたと思います。恥ずかしくて途中で走るのをやめても不思議ではありません。でも、決めたことを達成させようと最後まで頑張ったカルナナダさんは素晴らしいですね。ビリではありますが、自分で決めたことをしっかりと守ったのです。

みなさんも夢や目標があると思います。夢や目標に向けて「できない」とあきらめずに最後まで頑張りましょう。

背中越しの挨拶

大隅北小(隅) 宇都 佐和子

今日も元気よく挨拶ができましたね。皆さんの挨拶で私は毎日元気をもらっています。今日は、とてもうれしかった挨拶の思い出をお話したいと思います。

私が学級担任をしていた頃、『元気よく挨拶しよう。』という学校の目標があったので、みんな毎朝、校門で元気よく挨拶して入ってくるのですが、教室に入る時や帰る時は、挨拶する人、しない人がいて、声も小さくて目標にはほど遠いものでした。

ある日の夕方、私が廊下の窓を閉めていると、『さようなら。』という声が私の後ろから聞こえました。振り返ると、私の周りには誰もおらず、廊下の向こう側に、私の学級のAさんがいました。「あ！私に言ってくれたんだ。」と気付き、「さようなら。」とあわてて返すと、Aさんは軽く頭を下げて帰って行きました。私とAさんの間は2クラス分ぐらい空いていましたが、彼は特に大声を出したわけではありません。でも、私の背中越しに、Aさんの「さようなら。」はしっかり届いたのです。私はうれしくなりました。

次の日、学級でAさんの名前は出さずに、私

のうれしかったこととして話しました。すると「後ろ向いている人にはしないよね。」「姿が見えていても、遠いと声かけないよ。」「挨拶しても返してくれないと、恥ずかしいよ。」と、学級の中からいろいろな感想が出てきました。

その話をした後、私の学級には朝夕の挨拶だけでなく、いつでも周りの友達や先生方に自分から元気よく挨拶する人が増えました。Aさんの挨拶も学級の皆の挨拶も、どちらもうれしかった私の思い出です。

皆さんだったら、ちよと離れたところにいる人や自分の方を向いていない人に挨拶しますか？なかなかできないことですよ。挨拶一つで自分も相手もうれしくなったり、互いに気持ちよく過ごせたりするって素晴らしいことだと思いませんか？いつでも誰にでも、挨拶ができる皆さんになってほしいと思います。



SDGs

曾木小(始) 山田 俊也

これ(SDGs)を読んでみてください。
「エス、ディ、ジー、ズ」(高学年のみ最後のsを「ズ」と読む。)

これは、「ずっと続けていくことができる目標」ということです。

例えば、「エネルギーをみんなに クリーンに」や「海の豊かさを守ろう」などがあります。難しいことはありません。曾木小学校の皆さんは、今すでに行っていることもあります。それは、アルミ缶回収です。アルミ缶は、燃やせないゴミとして出すこともできますが、リサイクルすると、再び新しいアルミ缶になって使うことができます。他に皆さんが行っていることはありませんか。

「段ボール、新聞紙、空き瓶回収」(次々に児童の発言)

農業の発展も関係しています。学校前の水田では、農業用ドローンを使って肥料を散布されている方がいらっしゃいました。暑くて長時間かかる作業も短時間で済み、ガソリンではなく電気を使うので、人にも環境にもやさしい作業をすることができます。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



この目標達成のために世界中が努力をしています。また、今から九年後の二〇三〇年までに達成しようという目標も決められています。今の五年生がちょうど二十歳になったころ、この目標が達成されているように、子どもからお年寄りまで、男女の違いなく、住む国によって異なることなく、できることを少しずつやっていかなければなりません。

それは、地球環境、人、あらゆる生き物、歴史や伝統が豊かであり続けるためのものです。



メジャーリーグのメモリアルデーに思うこと

亀津小(大)

狩集

淳

ベーブ・ルース、サイ・ヤング、ハンク・アーロン、野球をしたことがない方でさえ、一度は聞いたことがある名前ではないだろうか。メジャーリーグで活躍した往年の名選手たちである。

メジャーリーグは、今から、百二十年ほど前、アメリカで組織されたプロ野球機構である。皆さんもご存知のとおり、アメリカンリーグ・ナショナルリーグの二つのリーグで構成されている。野球をしているものであれば、誰もがあこがれる夢舞台である。また、最近では、多くの日本人選手の活躍により、広く報道されるようになってきた。

さて、皆さんは、メジャーリーグの選手たちが、同じ背番号をつけてプレーをする日があることをご存知だろうか。毎年一回、賛同する全

ての選手・審判が、同じ背番号をつけプレーする。それは四月十五日、『ジャッキー・ロビンソン・デー』である。松井もイチローもダルビッシュも、そして大谷も、この日だけは、『42』の背番号をつけてプレーしてきた。

今から七十年前程前、当時のアメリカには、まだ人種差別が残っていた。メジャーリーグにおいても同様で、いわゆるヨーロッパ系の人活躍する場であった。アフリカにルーツのあるロビンソンは、ドジャースのGMや監督など、多くの人々のバックアップにより、大リーグに挑戦した。開幕当初は、一緒にプレーすることを拒む選手や他チームへのトレードを志願する選手など、様々なことが起こった。対戦するチームからは試合をボイコットするとの表明も多数あった。しかし、彼はそのような中、全力でプレーする姿を通して、多くの人々の心を掴み動かしていった。

彼は、新人賞を始め、いくつものすばらしい成績を残している。しかし、それ以上に彼がベースボールを通じて残したものは大きい。『ジャッキー・ロビンソン・デー』は、そんな彼の勇気や功績を称え、誇りとする一日として、二〇〇七年から開催されてきている。ちなみに現在では、彼の背番号『42』をつけているメジャーリーガーは一人もいない。彼の背番号は、メジャーリーグで唯一、全ての球団における共通の永久欠番となっている。

障がい者スポーツの教育的価値について考える

牟礼岡小(市)

吉松 公一

今年の夏は、東京オリンピックとパラリンピックが開催され、テレビの前で手に汗を握りながらアスリートたちの奮闘を見守った。特に、パラリンピックは、障がいをもつかもしれない選手たちの素晴らしいパフォーマンスに驚きと尊敬、感動でいっぱいになった。

この東京パラリンピックは、原則無観客での開催だったが、子供たちには、競技を観戦させる学校連携観戦プログラムが実施された。このコロナ禍での観戦については、大きな物議を醸すこととなったが、個人的な意見は避けたいと思う。しかし、障がい者スポーツを子供たちに観戦させるといふ教育的な意義はとても大きいと思う。

大会のコンセプトの一つは、「多様性と調和」であった。障がいの有無にかかわらず、みんなが共存していくというオリパラのビジョンは、相手の個性を尊重し、相手を思いやって生きていくという、今の子供たちに求められている教育的価値と合致するのである。

さて、二〇二三年に鹿児島国体が開催されるが、その後に開催される全国障害者スポーツ大会のことを、どれだけの障がいの方がご存じだろうか。

全国から選考された障がいのある選手が鹿児

島県に集結し、十四種目の競技で熱戦が繰り広げられる。当然競技を観戦してほしいのだが、障がいのある方々と街で出会う機会もきつとあると思う。子供たちが街中で、障がいのある方が困っている場面に出くわしたとき、「どうなさいましたか。」と一声かける勇気をもってほしい。

東京パラリンピックの閉会式の中で、橋本聖子会長が「変化は気づきから始まる」という言葉を述べられた。子供たちが、障がいのある方々と触れ合うことで何かに気づく。そんな機会を我々はつくっていくかねばならないと思う。



土いじり

鹿屋女子高

濱 島 幸 治

小中学校には学級園があり、その活動を通して土に触れる機会に恵まれているだろう。

しかしながら、高校生活の中で、土に触れる機会のある生徒はいかほどであろうか。

平成二十五年、鶴丸高校に赴任した四月のことである。体育館横の花園を拝借して花でも植えようかと思ったが、生徒に野菜の生長を見てほしくなり野菜を育ててみた。在任九年間で育てた作物は、キャベツ、白菜、ジャガイモ、青梗菜、水菜、落花生、ホウレン草、トウモロコシ、なす、ピーマン、オクラ、大根、カブ、最後はスイカ、マクワウリといろいろなものに挑戦した。

収穫物は、職員で共有した。夏季補習の昼食時間に食べたスイカは、格別であった。生徒たちも、それぞれの作物の生長を目にしながら、何ができるのか興味を持った者も少なくなかっただろう。草取りをしていると手伝ってくれる生徒もいた。収穫を手伝ってくれた生徒には、少しではあったが作物を渡すと喜んでくれた。最近のクイズ番組では種、双葉、茎や花の写真からどんな植物かを当てるものもある。菜園を注視していた生徒は、間違えなく解答すること期待したい。

特に印象的だったことは、いろいろな悩みを

抱え保健室登校していた生徒との関わりである。ある日、その生徒と一緒に大根の種蒔きをした。私が鋤を入れ、立てた畝に、一か所に三粒ほど種を蒔く。ジョウロで水をかけると三日ほどで発芽し、本葉が五枚ほどの時、三本を一本に間引く。当然、間引いた大根は味噌汁の具になる。土寄せ、除草、追肥を繰り返すこと約二か月半ほどで収穫できる。登校できた日は必ず、生長を見に行き、その様子を養護教諭に楽しそうに報告していたらしい。除草もしてくれていた。収穫した大根は、母親に煮つけにしてみらって食べ、おいしかったと報告してくれた。

土いじりが、何かしら人のメンタルに影響を与えるのは確かだろう。視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚という五感が刺激され、感受性・感性を育てるとも言われている。今後も機会があれば、生徒と一緒に「土いじり」したいものだ。



読書案内



■篠田桃紅 著

「一〇三歳になってわかったこと」

西原小(隅) 新屋 公彦

「一〇三歳になってわかったこと」である。胸を張って健康的な生活をしているとは決して言えず、身内にも百歳をこえるような長寿の者もない私にとつて、知り得る可能性が限りなく低い何かがこの本の中にはあるのではないかと思わず手に取った。

筆者は、墨を用いた抽象表現主義者で、今年の三月に百七歳で亡くなった日本の美術家である。本の中には、「うらやましくも今の私には残念ながら絶対に無理。しかし、いつかは。」という気持ちにさせる筆者の言葉があった。①時間でもお金でも、用だけをきっちり済ませる人生は、「1+1=2」の人生です。無駄のあ

る人生は1+1を10にも20にもすることができ。なんとなく過ごす。なんとなくお金を使う。無駄には、次のなにかが兆している。②私は予定や目標、スケジュールといったものを一切立てない。予定や目標にとらわれると他が見えなくなる。時にはその日の風任せにする。

一方で、「今の私が即実践すべき。これが今の私にとって足りない部分だ。」と思わせてくれる言葉もあった。①誰もやらないときに、やったことが大事。人の成功を見届けてからの、後出しじゃんけんではつまらない。受け入れられるか、認められるかよりも、行動したことに意義がある。②知識に加えて、感覚も磨けばものごとの真価に近づく。虫が知らせる、虫が好かない、を大切にする。

この本に出会えたことで、ほぼ半分の年でありながら、一〇三歳の様々な境地・人生観を感じることができた。「感じる」ではなく、「体験」できることを願いながら最後にもう一つ筆者の言葉を紹介する。

「長く生きたいと思うのは、生き物としての本能。年老いるとそうなる。一〇三歳だからわかる。生きているかぎり、人生は未完成。」

幻冬舎 一〇〇〇円

■山中伸弥 平尾誠二・恵子 著

友情

山田中(始) 飯 山 哲 志

山中伸弥氏や平尾誠二氏については、皆さんよく知っておられると思うが、まず簡単に紹介させていただく。山中伸弥氏は、二〇一二年のノーベル医学生理学賞の受賞者でiPS細胞の発見者として有名である。一方、平尾誠二氏は、ラグビー日本代表の元監督で、高校時代の優勝をテレビドラマ化した「スクールウォーズ」は、当時有名になった。私自身、二人が友人であり、固い信頼関係で結ばれていることはこの本を読むまで知らなかった。この本からは、それぞれ一流と言われる二人が、お互いの目を通してそれぞれの素晴らしさにリスベクトし、お互い高め合おうとする姿勢が伝わってくる。それはお互いの人間性であったり、仕事の上での考えであったりと多岐に渡るが、私自身、特に参考になった部分について以下述べてみたいと思う。まず、人間性についてである。平尾さんは、山中さんのことを「改めて誠実であることの大切を痛感した。」と述べておられる。また、山中さんは、平尾さんのことを「人を笑顔にし、

元気にする、おひさまのような温かいオーラをもっていた。」と述べている。また、私が大変参考になり大切にしている言葉が平尾さんが述べた「人を叱る時の四つの心得」である。具体的には①ブレーは叱っても人格は責めない。②あとで必ずフォローする。③他人と比較しない。④長時間叱らない。この言葉は、山中さんも大切にされているとのことだ。

その他、リーダー論を含め、この本の中には頂点を極めた二人だからこそその言葉や、更なる高みを目指しての取り組み方など、多くのことを示唆してくれる。コロナ禍で閉塞感が漂う中、この本を読むと元気が出て前向きになれる一冊だと思う。是非御一読いただきたい。

講談社 七五〇円



■中野善壽 著

ぜんぶ、すてれば

三島大里学園(郡) 山 内 まるみ

「今日がすべて。

颯爽と軽やかに、ぜんぶ捨てれば。」

本書は、経営者として数々の伝説を残してきた中野善壽氏の生き方を紹介する本である。本当にこんな人物が存在するのかと、その徹底したミニマリズムに圧倒されながら、短く読みやすい文体も手伝って、あつという間に読了した。日本を代表する建築家の隈研吾氏に「日本の経営者の中でも『破格』の存在」と言わしめる中野氏の生き方は、これからの「生き方」について深く考えさせられるものであった。

実は上鹿する船上で読もうと、電子書籍の読み放題サービスから軽い気持ちでダウンロードした。ものであふれている我が家をなんとかしたいと思い、タイトルだけで選んだのだが、それが幸いして出会えた貴重な本である。

「目標はいらぬ。

がんばり過ぎたら、やめていい。」

これは、夢や目標、努力や継続の大切さを日々子どもたちに説いている身としては穏やかでは

ない提言である。氏は、特に夢や目標を持ってなくとも「今日を楽しく、夢中になれることに集中」し、頑張り過ぎていると感じた時は「やる勇氣」が大事だと言う。その上で断言する。「世の中に安定はない。」

常に流れるのが自然の摂理。」

現代社会で自立して生きるためには、安定を求めるのではなく変化に対応する力を鍛えることが必要だと言う。

中野氏はどこまでも自分に正直な「勇氣ある生き方」を実践されているのだ。ふと、「嫌われる勇氣」「幸せになる勇氣」で知ったアドラー心理学に通じるものを感じた。

中野氏は、本も読み終えたら捨てるそうだ。読みたくなった時にまた買えばいいと言う。氏の生き方に大いに感銘を受けた私は、電子書籍で読み終えたこの本の単行本を買った。手元に置いて何度もページをめくりたい本である。
ディスカバー・トゥエンティワン 一五〇〇円



■吉川英治 著

「宮本武蔵」

申良中(隅) 鹿 島 道 朗

東京オリンピック・パラリンピックが終わった。開催をめぐっては賛否両論あったが、オリンピックを目指し、不断の努力で競技に臨んだ一流のアスリートの活躍に感動や勇氣、希望をもらった。

この本の主人公、宮本武蔵。この人も剣という道を究めようと「千鍛万練」の修行に邁進した人物である。一流のアスリートの生き方と相通ずるところがある。また、最近では「二刀流」といえば、大リーグの大谷翔平選手を想像するが、宮本武蔵は剣の道における「二刀流」の開祖として有名である。

さて、前置きが長くなった。「宮本武蔵」である。この本の物語については、よくご存知の方が多くと思うので、簡単に紹介したい。物語の前半は、武蔵を慕うお通の一途な思いに葛藤しながらも剣の修行に打ち込んでいく武蔵の姿や、吉岡一門との戦いなどが書かれている。そして、後半は、ライバル佐々木小次郎との「巖

流島の戦い」までが書かれている。

小説のフィナーレを飾るのは「巖流島の戦い」。皆さんも知つてのとおり、結果は武蔵の勝利に終わる。この戦いの後、武蔵は、世間の人々から様々な批判をうける。こうした批判に対して、作者は、次の言葉でこの小説を結んでいる。

「波騒（なみざい）は世の常である。波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚は歌い雑魚は踊る。けれど、誰か知ろう、百尺下の水の心を、水のかさを。」

学校経営に関して、時として、様々な批判をいただく時がある。それらの批判については、真摯に受け止めなければならぬ。一方で、判断し実践した本人にしか分からない部分があるとも思っている。校長職に身を置く者として、広い視野で深い判断ができるよう努めていきたいものだと、この文章を読むたびに思うことである。

講談社文庫 八一〇円



県内の専門高校では、それぞれの特色を生かした「体験教室」を夏休みに計画している。本校でも生徒が先生役を担う「親子ものづくり教室」を開催しており、その教室の中で、小学生が懸命に「ものづくり」に取り組み姿を見ることがある。一生懸命な子供たちの姿を見てみると、ものづくりの楽しさをいつまでも覚えておいてほしいと願わずにはいられない。見学中にふと小学校高学年だっただろうか、家の発条仕掛の柱時計が動かなくなり、勝手に自分で直せるだろうと修理に挑戦したことを思い出した。それは、柱時計の中身を知りたいという好奇心からであった。父の工具箱を持ち出し、新聞紙の上

に振り子、長短針、文字盤と分解を進め、初めて目にする機械式駆動部の歯車や部品の組込み方の美しさに魅了された。

て、小ネジの多さや小歯車の外し方に戸惑いを覚えながらも分解している時はとても楽しかった。分解後、故障原因も解明できず、諦めて組み立てに移る。分解手順と逆にすれば大丈夫だろうと勝手に進めていたが、知識・技術や技能力が伴っていないためか、最後に小ネジと小歯車がいくつか残り、初めての挑戦は終わりを迎えた。後日、新しい柱時計に変わっていた。この無謀とも思える経験で、製作者に対する驚嘆とともに、自分の中に「ものづくり」への興味・関心が増していったことを覚えている。

さて、今年も東京オリンピック、パラリンピックの年であった。日本人選手の活躍をテレ

ビの前で熱く応援したことが思い出される。オリンピックと言え、教員になってから、「技能五輪国際大会」という「ものづくり」のオリピックがあることを知るようになった。正式には、国際技能競技大会と呼ばれている。中央職業能力開発協会ホームページによると、参加各国における職業訓練の振興と青年技能者の国際交流、親善を図ることを目的とし、一九五〇年にスペインとポルトガルとの間で選手が技能を競ったことから始まり、回を重ねる中で参加国は増え、若い技能労働者の大会に発展していったと内容が見られた。日本が初参加した

趣味・文芸

「ものづくり」

鹿児島工業高

大保

智

して制限時間内に課題へ挑戦している姿や選手を見守る関係者の様子は今も忘れられない。本県から製造業関連の企業に就職した生徒の中に、この「ものづくり」のオリピックを目指す者もいる。彼らは科学技術創造立国日本を支える人材と言えよう。二〇一九年に開催されたロシア連邦大会では、日本選手四十八人が参加し、金メダルは二個、メダル獲得総数は十一個であった。今年末に東京都で開催される国内大会の各競技優勝者は、二〇二二年中国・上海大会に出場する予定である。代表選手の大活躍に期待したい。

一九六二年の第十一回大会以降、この「ものづくり」オリンピック大会は、日本でも三回ほど開催された。二〇〇七年（平成十九年）の夏、私は、日本での国際大会を静岡県へ見に行つた。資料を見返すと、四十六か国・地域から八百十二人（日本選手五十一人）が参加し、メカトロニクス、CNCフライス盤、自動車工（整備）など四十七職種で競技が行われており、日本の金メダルが十六個、メダル総数は二十四個獲得していた。なんと、金メダルの数は前回大会に引き続き、世界第一位と記されていた。若者の「ものづくり」に賭ける情熱が凝縮された各国代表選手の真剣な眼差し、機敏な作業を通

た。ものづくりは人づくりと言われるとおり、幼少期から多様な「ものづくり」を通して、好奇心から始まり、創意工夫や課題解決に向かう力が醸成されていくのだと思う。将来、「ものづくり」に関わる人が増えることを願っている。工業高校において、体験の機会として開催される「親子ものづくり教室」などに参加してくれる児童・生徒が一人でも増えればありがたいことだと心から思う。今も少年期の柱時計の中身を知りたい、ものをつくりたいと思っていた頃と変わらず、「ものづくり」に関することへの興味・関心は尽きない。

パナソニック創業者の松下幸之助氏は「ものをつくるまえに人をつくる」と語り、信頼されるものづくりのために人材の育成を大事にしてい



校区の未来を担う学校づくり

隼人中(始) 三戸瀬

智

一 校区の自然・歴史・文化・産業

本校区は、神代の昔、彦火火出見尊の都とされた高千穂宮の所在地と伝えられ、校区にはそれまつわる遺跡が散在している。特に、隼人族の菩薩を弔った国の史跡である隼人塚が今なお残り、当時は南九州の政治、経済、文化の中心地であったことを物語っている。その後、幾多の変遷を経て、島津義久が富隈の地に居住してから始良地方の中心地として繁栄し、また義久によって開かれた浜之市港は交通貿易上必要な位置を占めていた。さらに、宮内一帯は鹿児島神宮の門前町として栄え、その後肥薩線の開通により隼人駅一帯も商業地として栄えてきた。

現在は平成十七年に一市六町が合併し、霧島市となった。西部は始良市に接し、南部の浜之市地帯、北部の鹿児島神宮門前地帯、西部の小浜、小野地帯などに分けられ、農業面

では水稲、施設園芸、茶、みかん等、水産業では隼人ぶり、うなぎの養殖、工業面では情報通信機器や電子部品を製造する企業が誘致されている。また、近年は商業施設が多く立地され、観光にも力を入れている。

二 校区の概要

本校は東に天降川の清き流れを擁し、北に霧島連峰、南に桜島の雄姿を仰ぎ見る国分平野のほぼ中心に位置し、教育環境に恵まれている。生徒は明るく活力にあふれ、校区民の教育・文化に対する関心も高い。

隼人校区は、近年、企業の進出や人口増加に伴う経済活動が活発になっている。そのため、人口増が顕著であり、校区内の未就学児及び児童生徒数が増加傾向にある。空港や高速道路、国道等の交通基盤整備により、さらに発展する傾向にあり、教育環境への影響を加味しながら、温故知新の教育の整備が求められている。

三 隼人校区

隼人中学校区は、富隈、宮内、小野、小浜、天降川の五小学校と隼人中学校からなっている。また、校区内には、鹿児島工業高等専門学校、県立隼人工業高等学校等の教育機関がある。今後、五小一中において、小中連携を活性化させ、学業面及び生活指導面、保健・体育面において、個別化と共有化を明確にし

て義務教育九年間で「ふるさと隼人を愛し、ふるさと隼人に貢献できる」人材の育成を重視する教育活動を展開する計画を策定中である。

学校沿革では、創立七十五年、二万二千人を超える卒業生を輩出、ここ数年は七百五十人前後の生徒数であるが、生徒数は増加傾向であり、数年後は九百人を越す生徒数が見込まれている。「租税教育」等の学業面の多様な研究実績はもちろん、部活動の数多くの輝かしい実績が残されている。昭和・平成では、バレーボール、ハンドボール、ソフトボール、剣道、柔道、陸上部などの活躍がめざましく、そして、令和に入ってもハンドボール部は県内・九州でも活躍し、全国大会にも出場している。現在、大規模校舎改築工事中で、令和七年度完成後は新たな環境での教育活動が期待されている。

四 おすすめ見学ポイント

歴史に関心のある方々に、ぜひ見学してもらいたいのは「隼人塚」である。近隣に「隼人塚史跡館」があり、石像の復元状況や発掘状況を紹介する写真パネルや平安時代に作られた石仏、文献資料が展示されている。館外には復元された隼人塚石塔が建立されている。

*** ころの詩 ***

万葉集を読む

沫雪のほろほろに降りしけば
奈良の都し思ほゆるかも

大伴旅人が大宰府赴任中に詠んだ歌。

沫雪は粉雪のことだろう。その粉雪が盛んに降るのを見ると、奈良の都が思い出される、という趣旨で、粉雪の降ることに望郷の思いを重ねているものだろう。「ほろほろ」は、普通は粉雪の軽い感じがニュアンスとして含まれているとされるが、ここでは雪が盛んに降ることの形容詞に使われている。

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○再任 令和三年十月二十五日付

西之表市 佐藤 秀正 氏

季節の言葉 「霜よけ」

母親と霜よけにして寝た子かな 一茶

庭木や草花を霜の害から防ぐためのもの。藁や筵などで草木を覆うのが一般的。蘇鉄などの亜熱帯植物を菰で包んだり、松などでも樹皮を守るために覆いをする。藁などをいぶしたりして防ぐ方法もある。牡丹や芍薬のような背の低い草木には藁で作った覆いが被せられる。



編集

後記



本年度から初めての校長職を拝命しました。三月までは、重要な事項について上席の判断を仰いでいましたが、日常的に自校における最終判断を求められる立場になり、その責任の重さを実感する日々です。そんな中、広報常任部員を務めさせていただき、編集作業とおして多くの先輩方の教育に関する提言、学校経営についての理念や方策、様々なエピソードや所感等に触れることで、励まされ、学校の管理経営に関する多くの示唆をいただいています。そのことに心より感謝いたします。もう、二十年以上前のことですが、ある先輩が「ひと・もの・こと」から学べる教師だけが成長できる」と語ってくださいました。ここでの「もの」とは「本」のことを指し、様々な文章を通して先人の英知に触れ、これからの人生や教育活動の指針を得ることが重要なのだと、その先輩は熱く説いておられました。今でも、そのお言葉とお姿は私の中に深く刻まれています。

一般の「師の道」の編集作業の際に、お世話になった数々の先輩方の玉稿に触れ、お世の流れの速さを感じるとともに、その語り口にお人柄を懐かしく思い出すことでした。そして、今も心に残る先輩方のお言葉や行動、御判断の背景には、このような思い、理念や哲学、それらを培った御経験があったのだと深い感慨を覚えることでした。このように、広報部の編集作業は、改めて文字・活字をとおして先輩方が蓄積してきた知識や知恵を継承していくことの意義を実感させていただき、貴重な学びの機会となりました。

最後になりましたが、今号もご多用の中に玉稿を寄せていただいた執筆者の皆様方に、厚く御礼申し上げます。

(郡山中学校 内 健史)